大巻薩摩工事役館跡

宝暦4年（1754）から翌宝暦5年にかけて薩摩藩が治水工事の本部として使用した本小屋。岐阜県の史跡に指定されている。幕府が工事総括の場として選定した鬼頭兵内の建物を修繕したもので、会所や宿からなり、増築を重ね、畳399帖の規模であったと伝えられている。

根古地薩摩工事義歿者墓

地元では浄土三昧とも呼ばれており、宝暦の治水工事で亡くなった24名の薩摩義士が埋葬されている。岐阜県史跡。

昭和35年6月12日、排水路の改修工事に伴って発掘が行われており、遺骨を納めた7個の甕が確認された。このときの遺骨は墓碑の南端に再度埋葬され、遺骨が納められていた甕のうち1個は現在天照寺に保管されている。この発見を契機に慰霊堂が建てられた。

天照寺薩摩工事義歿者墓

天照寺の境内に所在しており、岐阜県の史跡に指定されている。宝暦治水工事で亡くなった義士の内3名が埋葬されており、それぞれが墓石をもっている。

薩摩義士と宝暦治水

養老町を含む木曽三川流域の輪中地帯の歴史は、水害の歴史であり、水害がおきるたびに田畑はもちろん、家も流され、家族の誰かが溺れて亡くなっていきました。人々はこうした度重なる水害に対応するため、村を輪中堤で囲むなど個別に対策をとる一方、水害の大きな原因となっていた木曽三川合流という問題を解決することを悲願としてきました。

木曽三川は当時伊勢湾の上流14kmのところで合流していましたが、三川それぞれの川底の高さは同じではなく、木曽川・長良川・揖斐川の順に低くなっていたため、水が増えるとみな揖斐川の方へ流れてきてしまうためです。

しかし、そうした工事には莫大な費用と高い技術が必要であり、輪中地帯の治水工事の嘆願はすぐには実現しませんでした。

こうした時代背景の中、宝暦3年（西暦1753年）江戸幕府はこの美濃から1,200kmも離れた薩摩藩に、幕府の設計に基づいて、人手・お金・材料を負担して工事を実施するよう命令を出しました。

これには、旧高須藩主であった尾張藩主徳川宗勝が今は実子が藩主を務める高須藩領や尾張藩領、幕府領を水害から守り、さらに雄藩であった薩摩藩の経済力を弱めるねらいがあったと考えられています。

薩摩藩ではこの命令に対し、おもだった家臣の全てが集められての会議が行われましたが、意見はまとまらず、むしろ「命令を突き返し、一戦を交えてでも断るべき」という意見が大勢を占めました。

そうした中、薩摩藩家老平田靭負公の意見は「縁もゆかりもなく、遠い美濃の人々を水害の苦しみから救済する義務はないかもしれないが、美濃も薩摩も同じ日本である。幕府の無理難題と思えば腹が立つが、同胞の難儀を救うのは人間の本分であり、耐え難きを耐えて、この難工事を成し遂げるなら、御家安泰の基になるばかりでなく、薩摩武士の名誉を高めて、その名を末永く後世に残すことができるのではないか」というものでした。

これによって、薩摩藩は幕府の命令に従うことを決め、翌宝暦4年（西暦1754年）2月に工事は開始されます。

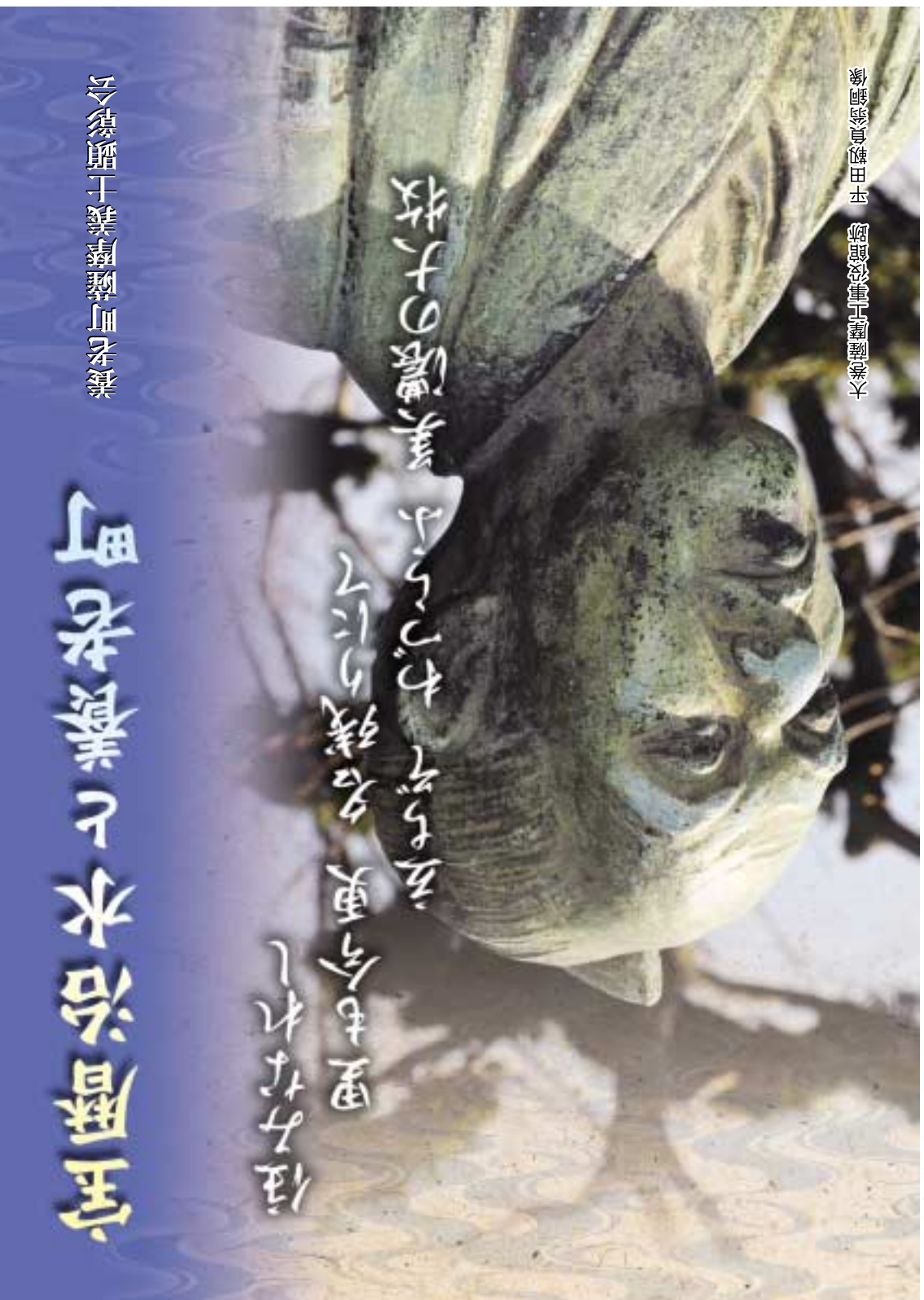
工期は第1期工事と第2期工事に分けて行われました。第1期工事は主として、前年までの水害によって破壊された堤防等の災害復旧工事を中心として行い、第2期工事では三川とその支流において川分堤・洗堰・締切堤・掘割等の難工事が中心でした。油島締切堤と大榑川洗堰もこの第2期工事で実施されています。

宝暦5年（西暦1755年）3月ついに工事は完了しますが、薩摩藩は、この間に約40万両という工事費を支出し、薩摩藩士に53名の自刃者と33名の病死者を出しました。当時の幕府の歳入が70～80万両であったことや薩摩藩の全体の借入金が66万両であったことを思えば、いかにこの宝暦治水工事が難工事であり、また幕府と薩摩藩の複雑な対立関係や地元役人との対立が薩摩藩士を死に追いやったかを伺うことができます。

総奉行を務めた平田靭負公は工事の完了を薩摩藩に報告した後、養老町大巻においていた工事の本部（大巻薩摩工事役館跡）において、「住みなれし　里も今更名残りにて　立ちぞわづらふ　美濃の大牧」の辞世を残し、悲壮な最期を遂げました。享年52歳でした。

後世、これらの薩摩藩の宝暦治水工事の犠牲者の義挙を讃え、平田靭負翁以下の薩摩藩士達は「薩摩義士」と呼ばれるようになり、現在にもその功績が伝えられています。

養老町の宝暦治水関係史跡等 案内図



薩摩藩の宝暦治水工事年表

年 月 日	宝暦治水の主な出来事
宝暦３年５月 (1753)	幕府の代官吉田久左衛門、木曽・長良・揖斐三川の調査
8月 13日	濃尾地方大洪水
12月６日	幕府勘定奉行一色政沆、老中堀田正亮に治水工事の設計書、絵図面を提出
12月 25日	幕府、宝暦治水工事の御手伝普請を薩摩藩主島津重年に命ずる
宝暦４年１月 16日 (1754)	家老平田靱負が工事総奉行に、大目付伊集院十蔵が副奉行に任命される
1月 29日	平田靱負が薩摩藩士の一隊を率いて鹿児島を出発
2月 27日	第１期工事開始
閏２月９日	平田靱負、工事費７万両を工面して美濃大牧に着く
4月 14日	永吉惣兵衛、音方貞淵切腹し、薩摩方の最初の犠牲者が出る
5月 22日	第１期工事終了
6月 11日	濃尾地方大洪水、薩摩方復旧工事を命ぜられる
7月５日	藩主重年、世子重豪を伴い参勤の途中、一之手の工事場を巡視
7月 22日	濃尾地方大洪水、薩摩方復旧工事を命ぜられる
8月	薩摩方に病人続出、幕府から石集めの厳しい督促を受ける
9月 24日	第２期工事開始、油島堤防の下埋め工事開始
12月 18日	二之手工事完成。このころ大榑川洗堰工事開始
宝暦５年３月 27日 (1755)	一之手、四之手工事完成
3月 28日	三之手工事完成
5月 22日	全ての出来ばえ検分終了
5月 24日	平田靱負、国もとへ工事完成を報告
5月 25日	平田靱負、美濃大牧の本小屋で切腹
6月 13日	幕府、藩主重年の功を賞す
6月 16日	藩主重年死去
9月５日	幕府、伊集院十蔵ら薩摩藩士の功を賞す

平田靱負翁画像

天照寺薩摩工事義歿者墓に埋葬された義士

法　名	死亡年月日	俗　名
攝心常在居士	宝暦４年８月１８日	八木七郎右衛門
津門梁通居士	宝暦４年３月　４日	山口清作
雲峰月秀居士	宝暦４年４月２３日	松下清七

根古地薩摩工事義歿者墓に埋葬された義士

法　名	死亡年月日	俗　名
相覚了頓信士	宝暦４年　６月２７日	新右衛門
通報浄達信士	宝暦４年　７月１３日	六　平
覚智道本信士	宝暦４年　７月２１日	助次郎
秋道良白信士	宝暦４年　８月　４日	新右衛門
恢山良廓信士	宝暦４年　８月１５日	利右衛門
本空誓厳信士	宝暦４年　８月１８日	川合瀬兵衛
順光隨玄信士	宝暦４年　８月１８日	権右衛門
義感了應信士	宝暦４年　８月１８日	喜右衛門
一道立然信士	宝暦４年　８月２５日	長左衛門
浄翁清感信士	宝暦４年　９月　６日	惣左衛門
一空相林信士	宝暦４年　９月１３日	岩　七
円山了諦信士	宝暦４年　９月１５日	深見勘助
一超乗感信士	宝暦４年　９月２７日	六左衛門
本倒還立信士	宝暦４年　９月２７日	長　八
頂法灌受信士	宝暦４年１０月１７日	三四郎
玄入義門信士	宝暦４年１０月２３日	太田喜三右衛門
節霜義端信士	宝暦４年１１月　９日	仁　八
灌山頂雪居士	宝暦４年１１月２１日	大灌十左衛門
正融義春信士	宝暦５年　１月１２日	助四郎
風外浄航信士	宝暦５年　２月　９日	大橋七郎右衛門
春到岸誓信士	宝暦５年　２月１２日	与　八
陽観春察信士	宝暦５年　２月１３日	覚佐衛門
報運順應信士	宝暦５年　４月２８日	市右衛門
宝国諦林信士	宝暦５年　５月　８日	仁　助

薩摩義士を埋葬した甕（天照寺蔵）

薩摩義士の過去帳（天照寺蔵）

木曽三川流域大絵図（宝暦治水以前）
（名古屋大学附属図書館蔵）
※薩摩藩の治水工事前の木曽三川

木曽三川大絵図（宝暦治水以後）
（名古屋大学附属図書館蔵）
※薩摩藩の木曽川治水工事後の流域の様子がわかる。
大榑川口の洗堰締切と油島の締切がみられる。